大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

攻撃的発話に対する反応：高校生調査を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本韓国研究会 公開日: 2021-10-18 キーワード (Ja): インポライトネス, 社会的価値, 攻撃的発話, 不愉快度, 反応 キーワード (En): 作成者: 河, 正一, 金, 美順, 大上, 博右 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017524

日本韓国研究
第 1 号

攻撃的発話に対する反応

―高校生調査を中心に―

河 正一・金 美順・大上 博右

2021 年 9 月 30 日
日本韓国研究会
Japan Association of Koreanology

攻撃的発話に対する反応

―高校生調査を中心に―

河　正一（大阪府立大学）
金　美順（関西大学大学院博士後期課程）
大上　博右（兵庫県立鳴尾高等学校）

＜要旨＞

本稿は、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と反応を調査し分析した。

分析結果、攻撃的発話に対する不愉快度と反応には、社会的力関係より聴者の責任の有無という要因が大きく作用され、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高い傾向が見られた。対象別による不愉快度は、「所属」＞「外見」＞「能力」＞「性格」であり、すべての項目において女性の不愉快度が高く現れた。不愉快度が高くなるにつれ、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れる共に、その反応が多様化された。また、「性格」「能力」「所属」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定の反応のパターンが見られた。しかし、「外見」では、聴者の責任の有無に関わらず、多様な反応が見られ、とりわけ、女性のほうで重い反応（C 解明・言い訳、D 反駁）が示された。また、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。

キーワード　インポライトネス、社会的価値、攻撃的発話、不愉快度、反応

1. はじめに

対人関係におけるポライトな言語行動に比べ、インポライトネスはポライトネスの周辺的な言語行動として、ポライトな言語行動に反する望ましくない、避けなければならない否定的な対象という認識が強かったと言えよう。しかし、インポライトネスは、お互いの社会的価値を脅かす言語行動として、社会的秩

序や価値体系を明確に示すことにつながり、円滑なコミュニケーションの手助けとなる。

本稿では、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応を調査し分析することを目的とする。

2. 先行研究

インポライトネスに関する研究は[1]、Brown & Levinson（1987）のフェイス概念[2]から、ポライトネスに反する周辺的な言語行動として、インポライトネスの捉え方や話者の言語ストラテジーなどに焦点が置かれた研究が大半であった（Culpeper 1996, Culpeper 2008 など）。

一方、話者の言語ストラテジーではなく、聴者の反応に焦点を当てたCulpeper., Bousfield and Wichmann（2003）は、話者のインポライトネスに対する聴者の反応のストラテジーを「攻撃 - 防御」と「攻撃 - 攻撃」に分類し、「攻撃 - 攻撃」のパターンとして段階的拡大（escalation）を、「攻撃 - 防御」のパターンとして直接反駁（contradiction）、否認（abrogation）、未参加（opt out）、見せかけの同意（insincere agreement）などを提示している。

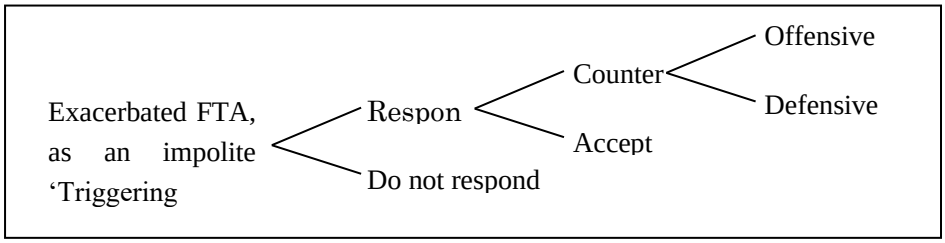

図１　フェイス侵害行為に対する聴者の反応（Bousfield 2008：203）

談話レベルがもたらすインポライトネスの重要性を唱えるBousfield（2008：

[1] インポライトネス研究の動向や問題点については、紙幅上、割愛する。詳細は、河（2014、2017）または薮内（2015）を参照されたい。

[2] Brown & Levinson（1987）は、社会の成員は皆ある種の基本的な欲求、すなわちネガティブ・フェイス（negative face）とポジティブ・フェイス（positive face）を持っているとする。ネガティブ・フェイスとは自分の行動が他人によって干渉されてほしくないという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは自分が大切にしている物や価値や行動などを他人によって理解されたり高く評価されたりしたいという欲求である。この二つのフェイスを脅かすような行動がフェイス侵害行為（Face-threatening Acts）である。

第 6 章）は、発話の初期段階（utterance ‘beginnings’）、中間段階（utterance ‘middles’）、終結段階（utterance ‘ends’）に分け[3]、中間段階におけるインポライトネスの反応のストラテジーを提示している。Bousfieldは、フェイス侵害行為を受けた聴者の反応のストラテジーを「反応すること（to respond)」と「反応しないこと（not to respond)」に分け、これらのストラテジーは「防御（defensive)」あるいは「攻撃（offensive)」の二つの性質を併せ持つとする。例えば、「反応しないこと」というストラテジーとしての沈黙は、時には自分のフェイスの防御として現れるものの、時には無視するという相手のフェイスを攻撃するストラテジーとしても現れる。また、「反応すること」というストラテジーは、相手のフェイス侵害行為を受け入れるか、または対応するかの選択が残されるが、受け入れることは謝罪や同意などでさらに受け入れ側のフェイスの侵害が拡大する。一方、「反応すること」はフェイス侵害行為に対する攻撃的または防御的ストラテジーが考えられるが、二つの選択は相反するのではない。すなわち、相手のフェイス侵害行為に対する防御的ストラテジーは、防御していく過程の中で意図的または付随的または防御的に相手のフェイスを脅かし得るためである。したがって、Bousfieldは反応のストラテジーを攻撃的ストラテジーか防御的ストラテジーかに分類せず、図 1 のように「反応すること」と「反応しないこと」に分け、「反応すること」のストラテジーは、攻撃的・防御的・受容的ストラテジーとして現れるとする。

이성범（2015）は、社会的力関係（話者＞聴者、話者＝聴者、話者＜聴者）における話者の攻撃的発話が明示的か非明示的かや聴者の責任の有無によって、聴者の印象と反応を調査している。調査結果、話者の攻撃的発話に対する聴者の印象と反応に聴者の責任の有無が最も重要な要因として働く。その上、明示的か非明示的かに関わらず、女性の方が男性より攻撃の認知度が高く現れる。つまり、女性は男性より相手の攻撃的発話に敏感に反応する。なお、聴者の責任の有無によって、責任のない場合に比べ、あるほうが攻撃の度合いを低く認識するという。いわゆる、聴者の責任が一種のフィルターとなり、話者の攻撃的発話をろ過するマスク効果（mask effect）をもたらす。さらに、男女を問わず、聴者の責任のない話者の明示的な攻撃的発話に最も攻撃の度合いを感じる。一方、聴者の責任のある話者の攻撃的発話では、女性は「非明示的（Indirect Utterance）＞ヘッジ（Hedged Utterance）＞明示的（Direct Utterance）」の順で、男性は「非明示的（Indirect Utterance）＞明示的（Direct Utterance）＞ヘッジ（Hedged Utterance）」で攻撃の度合いを感じるという。

---

[3] 発話の初期段階では、談話参加者間の対人関係の認識、背景知識などが重要な役割を果たす。中間段階は、話者のフェイス侵害行為に対して聴者はどのような反応を示すか、そして、終結段階では、相手との妥協、降伏、補償の提案などが展開される。

上記の이성범（2015）では、攻撃的発話の明示性の有無、対人関係における社会的要因、聴者の責任の有無を考慮した点が非常に優れている。しかし、攻撃的発話の場面の分類基準が明確ではないという点と聴者の反応がポライトネス観点に偏っているという点が不十分であろう。

3. アンケートの概要

言語行動の評価は、談話参加者における社会的価値とは何かと共に、社会的力関係における利益の衝突がいかに反映されて言語行動として現れるか、これら要因を考慮しなければならない。そこで、社会的価値として、攻撃的発話の対象を「性格」「能力」「外見」「所属」に分類し、社会的力関係（「話者＞聴者」「話者＝聴者」「話者＜聴者」）と利益の衝突（責任の有無）を考慮したアンケートを作成した（図 2）。

場面：一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「**これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな**」と言われた。

1. 発話を聞いてどの程度、不愉快に感じますか？

2. 発話を聞いてどのような反応を示しますか？
   ① 何も言わず、沈黙する。
   ② ごめんなさい。すぐやり直します。
   ③ まだ経験不足で、時間を考慮していませんでした。
   ④ 行事の時間が考慮されていない点はありますが、自分なりには結構できたと思いますが。
   ⑤ 行事の時間が考慮されていないとはいえ、使えないというのは失礼じゃありませんか。

図 2　調査内容

調査は、図 2 のように攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応、これら 2 点を尋ねる。社会的力関係における利益の衝突は[4]、談話参加者間の利

[4] ここで注意しなければならないのは、行為者の社会的価値の衝突が必ずしもわれわれを否定的な方向のみに働きかけられることはないということである。例えば、学校のクラスにし

益または不利益として現れ、言語行動の選択に根本的な影響を与える。そこで、利益の衝突として現れる攻撃的発話を相手の責任の有無に置き換え、聴者の責任による攻撃的発話と聴者の責任ではない攻撃的発話に分ける。その上、攻撃的発話の対象として、「性格」「能力」「外見」「所属」に分ける。つまり、社会的力関係や利益の衝突（責任の有無）、攻撃の対象を総合的に考慮し（社会的力関係 3×責任の有無 2×攻撃の対象 4、計 24 場面）、攻撃的発話に対する印象と反応を調査する。

従来の多くの調査方法では、特定の場面に対する言語ストラテジーを直接、記入する談話完成タスク(Discourse completion task：DCT)が多かった。しかし、この方法は、意識的であれ、無意識的であれ、円滑な言語コミュニケーションとしてのポライトな言語ストラテジーへの偏りが生じやすいため、インポライトネスの要素が表れにくい。このことは、断り・不満表明の先行研究においてインポライトネスに関わる言語行動がほとんど現れなかったことからも示唆される[5]。

そこで、調査では、攻撃的発話に対する反応として、それぞれの場面において A〜E というストラテジーを提示し選択する方法を採用した。

・A 沈黙（何も言わず、沈黙する）
　何も言わず、沈黙する。
・B 謝罪（謝罪する）
　ごめんなさい。すぐやり直します。
・C 解明・言い訳（解明または言い訳をする）
　まだ経験不足で、時間を考慮していませんでした。
・D 反駁（自分の考え方を明確に示す）
　行事の時間が考慮されていない点はありますが、自分なりには結構できたと思いますが。
・E 批判（相手の失礼さを指摘・批判する）
　行事の時間が考慮されていないとはいえ、使えないというのは失礼じゃありませんか。

以上、上記の社会的力関係（「話者＞聴者」「話者＝聴者」「話者＜聴者」）

ろ、その後の社会活動のクラスにしろ、互いの社会的価値の衝突として現れる競争がなければ、そのクラス及び社会活動というものは非常に低い水準の効率性を示すに違いない。つまり、人間の行動における攻撃性が必ず否定的な方向のみにわれわれを導き出すということはない。

[5] 日本と韓国における断り表現や不満表明などといった社会言語学的調査の動向については、河（2019）を参照されたい。

や責任の有無、攻撃の対象（「性格」「能力」「外見」「所属」）を取り入れ24の質問項目が、表1である。

表1　質問項目

1．今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ごしてしまって、40分ぐらい遅れて到着した。その際、先輩に「**大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしないんだから。**」と言われた。
2．一週間頑張って作成した文化祭の企画書を後輩に見せたら、後輩に「**これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないので、使いものにならないんじゃないですか。**」と言われた。
3．友達に昨日、好きな人に告白したが断られたという話をしたら、友達に「**もうちょっとおしゃれしてよ、顔があまりいけてないから**」と言われた。
4．自分の出身中学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けってしまった。それを聞いた先輩に「**また負けたって。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃない**」と言われた。
5．学校で共同作業をしていたが、自分のミスでもないことで、友達に「**また間違ってる、もうちょっときちんとしてよ、まったく**」と言われた。
6．朝から友だちと小高い丘をハイキングしていたが、1時間くらい、歩き回ったらもう歩けないくらい疲れてしまい、友達に帰ることを提案した。そしたら、友達に「**だめだよ、まだ1時間くらいしか経ってない。太りすぎ、ダイエットしてよ。**」と言われた。
7．一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「**これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな**」と言われた。
8．グループ発表の結果、私のグループが最下位であった。それを聞いた別のグループの友達に「**最下位だって、レベル低い。**」と言われた。
9．学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、後輩に休憩することを提案した。その際、後輩に「**30分前も休みましたけど。先輩は太りすぎですよ。ダイエットしてください。**」と言われた。
10．電車で居眠りをして乗り過ごしてしまい、友達との待ち合わせの場所に40分ぐらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についたら友達に「**待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしない。**」と言われた。
11．今朝、部活の先輩に呼ばれて、「**最近1年生の遅刻が多いみたいけど、お前がしっかりしていないからじゃないか。もっときちんとやれよ。**」と言われた。
12．部活の帰りに自分の第一印象について、後輩に聞いたら「**ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います。**」と言われた。
13．友達と一緒にそれぞれの出身校のマラソンを応援したが、残念ながら自分の出身校は予選落ちで終わってしまった。すると、友達に「**お前の学校、毎回参加する意味ある？**」と言われた。
14．電車の人身事故のため、友達との待ち合わせの場所に40分ぐらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についたら友達に「**待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしない。**」と言われた。
15．学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、先輩に休憩することを提案した。その際、先輩に「**何言ってるんだ。30分前も休んだでしょう。太ってるからじゃん。ダイエットしろよ。**」と言われた。
16．学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は1回戦で負けてしまった。その時、後輩に「**めっちゃ弱いですね。多分、小学生にも勝てないかも。**」と言われた。
17．今日は、電車の人身事故のせいで、来週の文化祭の打ち合わせに40分ぐらい遅れて到

着した。その際、先輩に「**大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしないんだから。**」と言われた。
18. 部活に参加してみたら、1 年生の遅刻が目立っていた。その際、後輩に「**最近、1 年生の遅刻が多いです。3 年生の先輩がみんなのお手本にならず、毎回遅刻するからじゃないですか。先輩らしくお手本を見せてください。**」と言われた。
19. 自分の出身中学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けってしまった。それを聞いた後輩に「**また負けたんですね。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃないですか**」と言われた。
20. 部活の新入部員歓迎会で、自己紹介をしたら、先輩に「**もうちょっとハツラツで体格のいい後輩が欲しかったな。**」と言われた。
21. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車の人身事故のため、40 分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「**待ち合わせの時間 1 時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。**」と言われた。
22. 授業の共同発表のため、自分なりに色々調べた内容を友達に見せたら、友達に「**内容があまり面白くないし、発表のテーマと趣旨がまったく合わない。**」と言われた。
23. 学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は 1 回戦で負けてしまった。その時、先輩に「**めっちゃ弱いじゃん。多分、小学生にも勝てないかも。**」と言われた。
24. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ごしてしまって、40 分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「**待ち合わせの時間 1 時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。**」と言われた。

24 の質問項目を社会的力関係や責任の有無、攻撃の対象によって分類すると、表 2 となる。

表 2　社会的力関係及び聴者の責任の有無（話者＝話、聴者＝聴）

性格	1	17	10	14	24	21
社会的力関係	話＞聴	話＞聴	話＝聴	話＝聴	話＜聴	話＜聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
能力	7	11	22	5	2	18
社会的力関係	話＞聴	話＞聴	話＝聴	話＝聴	話＜聴	話＜聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
外見	15	20	6	3	9	12
社会的力関係	話＞聴	話＞聴	話＝聴	話＝聴	話＜聴	話＜聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
所属	23	4	8	13	16	19
社会的力関係	話＞聴	話＞聴	話＝聴	話＝聴	話＜聴	話＜聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無

例えば、「性格」における質問 1 と 17 は、聴者の責任の有無、すなわち居眠りと人身事故の理由で遅刻した際に、先輩（話者）に言われる場面であり、10

と 14 では、友達に言われる場面で、24 と 21 は、後輩に言われる場面である。同様に聴者の責任の有無によって少し状況は違うものの、「能力」「外見」「所属」においても同様の組み合わせで作られた。

4. 分析結果と考察

調査は、2020 年 12 月から 2021 年 3 月にわたって、3 か所の高校（日本）で行われた。有効回答者の内訳は、表 3 の通りである。

表 3　回答者の内訳

		A 高校	B 高校	C 高校	合計
性別	男	22	34	21	77
	女	34	0	61	95
全体		56	34	82	172

質問項目 24 問の「不愉快」×「性別」の 2 要因分散分析を行った結果（SPSS）、「不愉快」の主効果は［F（23, 3910）＝40.74, p＜.001］で有意であった。なお、「不愉快」と「性別」の交互作用が 0.1％水準で有意であり（［F（23, 3910）＝3.68, p＜.001］）、性別の単純主効果は、0.1％水準で有意であった（［F（1, 170）＝27.45, p＜.001］）。詳細分析は、「性格」「能力」「外見」「所属」の順に論じていく。

4.1　「性格」の結果

「性格」に対する攻撃的発話の不愉快度をまとめると、表 4 となる。

表 4　「性格」に対する不愉快度

	1：話＞聴、有			10：話＝聴、有			24：話＜聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	2.2	2.5	2.4	2.0	2.2	2.1	2.0	2.4	2.2
	17：話＞聴、無			14：話＝聴、無			21：話＜聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	2.9	3.1	3.0	2.7	3.2	3.0	2.7	3.3	3.0

すべての質問において聴者の責任のない場合が聴者の責任のある場合より不愉快度が有意に高く現れた。なおかつ、女性のほうが男性より攻撃的発話に対する不愉快度が高く、とりわけ 14、21、24 で、男女の有意差が見られた。つま

り、社会的力関係という要因より聴者の責任の有無がより不愉快度に大きく作用され、女性のほうが攻撃的発話に対する不愉快度が高い。

表 5　「性格」に対する反応

1	男	B(83.1)＞A＝C(6.5)＞D(3.9)＞E(0)	17	C(50.6)>B>(19.5)>E(15.6)>D(7.8)>A(6.5)
	女	B(77.9)＞C(21.1)＞A(1.1)＞D＝E(0)		C(73.7)>B(17.9)>D(4.2)>E(3.2)>A(1.1)
	計	B(80.2)＞C(14.5)>A(3.5)>D(1.7)>E(0)		C(63.4)>B(18.6)>E(8.7)>D(5.8)>A(3.5)
10	男	B(81.8)>C(9.1)>A(7.8)>D(1.3)>E(0)	14	C(58.4)>B(14.3)>E(13.0)>D(10.4)>A(3.9)
	女	B(82.1)>C(11.6)>A(4.2)>E(2.1)>D(0)		C(77.9)>B(12.6)>E(6.3)>D(3.2)>A(0)
	計	B(82.0)>C(10.5)>A(5.8)>E(1.2)>D(0.6)		C(69.2)>B(13.4)>E(9.3)>D(6.4)>A(1.7)
24	男	B(70.1)>C11.7)>A(7.8)>D(6.5)>E(3.9)	21	C(53.2)>B(22.1)>E(10.4)>D(7.8)>A(6.5)
	女	B(75.8)>C(17.9)>A=D(3.2)>E(0)		C(66.3)>B(17.9)>E(9.5)>D(4.2)>A(2.1)
	計	B(73.3)>C(15.1)>A(5.2)>D(4.7)>E(1.7)		C(60.5)>B(19.8)>E(9.9)>D(5.8)>A(4.1)

聴者の責任の有無のペアである 1 と 17、10 と 14、24 と 21 において、明らかにその反応が異なっている。話者の攻撃的発話が聴者の責任による場合は、社会的力関係に問わず、B（謝罪）を選択するが、聴者の責任がない場合は、C（解明・言い訳）選択する解答が最も多かった。つまり、社会的力関係より聴者の責任の有無がその反応に大きな影響を及ぼす。

4.2　「能力」の結果

「能力」に対する不愉快度をまとめると、表 6 となる。

表 6　「能力」に対する不愉快度

	7：話＞聴、有			22：話＝聴、有			2：話＜聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.1	3.4	3.3	2.7	3.3	3.0	3.1	3.5	3.3
	11：話＞聴、無			5：話＝聴、無			18：話＜聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.0	3.2	3.1	3.3	4.0	3.7	2.9	3.3	3.2

全体の質問項目において聴者の責任の有無及び社会的力関係の要因による特徴は明白ではないが、聴者の責任の有無の対応である 22 と 5 では、有意差が見られた。また、すべての不愉快度において女性のほうが男性より高く現れ、そのうち、2 と 5、22 における男女の有意差が見られた。

表７　「能力」に対する反応

7	男	B(40.3)>C(22.1)>A(15.6)>D(14.3)>E(7.8)	11	B(45.5)>D(32.5)>C(11.7)>A(6.5)>E(3.9)
	女	B(47.4)>C(32.6)>D(11.6)>A(5.3)>E(3.2)		B(56.8)>D(26.3)>C(10.5)>A(6.3)>E(0)
	計	B(44.2)>C(27.9)>D(12.8)>A(9.9)>E(5.2)		B(51.7)>D(29.1)>C(11.0)>A(6.4)>E(1.7)
22	男	B(35.1)>C(23.4)>D(20.8)>E(11.7)>A(9.1)	5	C(46.8)>B=D(20.8)>E(7.8)>A(3.9)
	女	B(36.8)>C(29.5)>E(13.7)>D(12.6)>A(7.4)		C(42.1)>D(24.2)>B(16.8)>E(9.5)>A(7.4)
	計	B(36.0)>C(26.7)>D(16.3)>E(12.8)>A(8.1)		C(44.2)>D(22.7)>B(18.6)>E(8.7)>A(5.8)
2	男	B(44.2)>C(23.4)>D(14.3)>E(11.7)>A(6.5)	18	B(33.8)>D(28.6)>C(18.2)>A(13.0)>E(6.5)
	女	B(33.7)>D(22.1)>C=E(18.9)>A(6.3)		B(45.3)>D(26.3)>C(14.7)>E(10.5)>A(3.2)
	計	B(38.4)>C(20.9)>D(18.6)>E(15.7)>A(6.4)		B(40.1)>D(27.3)>C(16.3)>E(8.7)>A(7.6)

聴者の責任のある場合は、社会的力関係における友達と後輩に対して、E（批判）の反応が増えるものの、一般的に「B（謝罪）＞C（解明・言い訳）…」の傾向が見られた。一方、聴者の責任のない場合は、5 の友達関係では C（解明・言い訳）の反応が最も多く見られ、11 の先輩と 18 の後輩関係では、B（謝罪）の反応が最も多かった。なお、聴者の責任のある場合に比べ、D（反駁）の反応が多かったのが特徴である（「B（謝罪）／C（解明・言い訳）＞D（反駁）…」）。

4.3　「外見」の結果

「外見」に対する不愉快度をまとめると、表 8 となる。

表８　「外見」に対する不愉快度

	15：話＞聴、有			6：話＝聴、有			9：話＜聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	2.7	3.7	3.3	2.6	3.9	3.3	2.9	3.9	3.5
	20：話＞聴、無			3：話＝聴、無			12：話＜聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.5	3.7	3.6	3.2	4.2	3.8	2.2	2.8	2.5

15 と 20、6 と 3 では、聴者の責任の有無によって、不愉快度が高くなったが、9 と 12 では、むしろ下がった結果であった。9 における「30 分前も休みましたけど。先輩は太りすぎですよ。ダイエットしてください」は、相手への批判として、しかし、12 における「ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います」は、相手へのアドバイスとして受け止められたかもしれない。上記の「性格」「能力」と同様に「外見」の結果においても女性のほうの不愉快度が高く現れ、20 以外では男女の有意差が

見られた。つまり、女性のほうが「外見」に対する攻撃的発話をより重く受け止める。

表 9　「外見」に対する反応

15	男	B(35.1)>C(32.5)>A(16.9)>D(9.1)>E(6.5)	20	A(27.3)>B(23.4)>E(20.8)>D(15.6)>C(13.0)
	女	C(37.9)>D(18.9)>A(16.8)>E(14.7)>B(11.6)		A=C(26.3)>B(23.2)>D(13.7)>E(10.5)
	計	C(35.5)>B(22.1)>A(16.9)>D(14.5)>E(11.0)		A(26.7)>B(23.3)>C(20.3)>E(15.1)>D(14.5)
6	男	B(35.1)>C(26.0)>D(15.6)>A=E(11.7)	3	C(45.5)>A(23.4)>D=E(13.0)>B(5.2)
	女	D(32.6)>C(23.2)>A(17.9)>B(14.7)>E(11.6)		C(33.7)>A(24.2)>E(22.1)>D(13.7)>B(6.3)
	計	D(25.0)>C(24.4)>B(23.8)>A(15.1)>E(11.6)		C(39.0)>A(23.8)>E(18.0)>D(13.4)>B(5.8)
9	男	C(45.5)>A(15.6)>B(14.3)>D(13.0)>E(11.7)	12	B(31.2)>C(28.6)>D(18.2)>A(16.9)>E(5.2)
	女	D(31.6)>C(30.5)>E(20.0)>A(11.6)>B(6.3)		B(40.0)>C(29.5)>A(14.7)>E(8.4)>D(7.4)
	計	C(37.2)>D(23.3)>E(16.3)>A(13.4)>B(9.9)		B(36.0)>C(29.1)>A(15.7)>D(12.2)>E(7.0)

「外見」においての反応は、A（沈黙）、B（謝罪）、C（解明・言い訳）、D（反駁）の多様な反応が見られた。聴者の責任のある場合では、男性はB（謝罪）か C（解明・言い訳）の反応が多かったが、女性は、C（解明・言い訳）か D（反駁）の反応が多く現れた。このことは、上記で述べたように、女性のほうが有意に不愉快度が高かったことが重い反応を導いたと考えられる。聴者の責任のない場合では、B（謝罪）か C（解明・言い訳）の反応以外に A（沈黙）の反応も多く見られた。

4.4　「所属」の結果

「所属」に対する不愉快度をまとめると、表 10 となる。

表 10　「所属」に対する不愉快度

	23：話＞聴、有			8：話＝聴、有			16：話＜聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.2	3.8	3.5	3.0	3.9	3.5	3.5	4.2	3.9
	4：話＞聴、無			13：話＝聴、無			19：話＜聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.6	4.4	4.1	3.3	4.1	3.7	3.2	4.1	3.7

聴者の責任のある場合は、先輩と友達の社会的力関係に比べ、後輩に言われる攻撃的発話の不愉快度が有意に高かった。聴者の責任のない場合では、社会的力関係の要因による特徴は見られなかった。ただし、聴者の責任の有無と関連して 23 と 4 では、有意差が見られた。なお、すべての質問において男女の有

意差が見られ、さらに女性の不愉快度が男性より有意に高く現れた。

表 11　「所属」に対する反応

23	男	B(32.5)>A=E(24.7)>D(16.9)>C(1.3)	4	D(33.8)>A(26.0)>B=E(19.5)>C(1.3)
	女	B(41.1)>D=E(21.1)>A(14.7)>C(2.1)		D(37.9)>B(24.2)>E(18.9)>A(17.9)>C(1.1)
	計	B(37.2)>E(22.7)>A=D(19.2)>C(1.7)		D(36.0)>B(22.1)>A(21.5)>E(19.2)>C(1.2)
8	男	D(40.3)>A(23.4)>E(22.1)>B(10.4)>C(3.9)	13	D(32.5)>E(22.1)>A=B(16.9)>C(11.7)
	女	D(45.3)>E(31.6)>A(20.0)>B(3.2)>C(0)		D(44.2)>E(17.9)>B(15.8)>C(11.6)>A(10.5)
	計	D(43.0)>E(27.3)>A(21.5)>B(6.4)>C(1.7)		D(39.0)>E(19.8)>B(16.3)>A(13.4)>C(11.6)
16	男	E(32.5)>A(24.7)>B=D(20.8)>C(1.3)	19	D(31.2)>B(23.4)>A=E(19.5)>C(6.5)
	女	E(56.8)>D(20.0)>A(13.7)>B(7.4)>C(2.1)		D(34.7)>B(23.2)>E(21.1)>A(17.9)>C(3.2)
	計	E(45.9)>D(20.3)>A(18.6)>B(13.4)>C(1.7)		D(33.1)>B(23.3)>E(20.3)>A(18.6)>C(4.7)

聴者の責任のある場合は、社会的力関係によってその反応が明らかに異なっている。先輩の攻撃的発話に対しては、B（謝罪）が多く、友達には、D（反駁）が、後輩にはE（批判）の反応が最も多く見られた。一方、聴者の責任のない場合では、社会的力関係に関わらず、D（反駁）の反応が多く現れた。

4.5　考察

攻撃の対象別による不愉快度をまとめると、表 12 となる。

表 12　攻撃の対象別の不愉快度

	性格		能力		外見		所属	
	有	無	有	無	有	無	有	無し
男	2.1	2.8	3.0	3.1	2.7	3.0	3.3	3.4
女	2.4	3.2	3.4	3.5	3.9	3.6	4.0	4.2
計	2.2	3.0	3.2	3.3	3.4	3.3	3.6	3.8

「外見」以外は、聴者の責任の有無によって、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高く、なお、「性格」「能力」「外見」に比べ、「所属」に対する攻撃的発話に対する不愉快度が最も高く現れた（「所属」＞「外見」＞「能力」＞「性格」）。友定ほか（2002：99）によれば、集団意識とは、個の自己意識を基盤とし、みんなと活動するために、集団における自己を自覚することであり、この集団は活動の進展と共に形成し、やがて個人を超えて全体としての一つの意識となった新たな集団となっていくという。相手の所属や集団を攻撃することは、その人のアイデンティティーを否定することにつながるため、不愉快度は高く現れると予想した。ところが、個より所属に対する不愉快度が高く

現れた今回の結果は、非常に興味深い。今後、大学生と中学生調査とも比較が必要であろう。

また、이성범（2015：122）は、男性より女性のほうが攻撃的発話に対する認識が高いと報告しているが、今回の結果でも女性のほうの不愉快度が全ての項目において高く現れた。井出（2006：172-173）によれば、一般に女性のほうが友人、近所の人、夫の上司などのような社交上の人間関係を重んじる付き合いが多いため、より丁寧なことばを使っている。さらに、頻繁に丁寧なことばを使っているために、女性はことばの丁寧度評価も低くするという。つまり、通常の丁寧なことば遣いからかけ離れた攻撃的発話であるがゆえに、丁寧度評価が下がり、その結果、不愉快度が高くなったと考えられる。

表 13　対象別の反応

1	B(80.2)＞C(14.5)>A(3.5)>D(1.7)>E(0)	17	C(63.4)>B(18.6)>E(8.7)>D(5.8)>A(3.5)
10	B(82.0)>C(10.5)>A(5.8)>E(1.2)>D(0.6)	14	C(69.2)>B(13.4)>E(9.3)>D(6.4)>A(1.7)
24	B(73.3)>C(15.1)>A(5.2)>D(4.7)>E(1.7)	21	C(60.5)>B(19.8)>E(9.9)>D(5.8)>A(4.1)
7	B(44.2)>C(27.9)>D(12.8)>A(9.9)>E(5.2)	11	B(51.7)>D(29.1)>C(11.0)>A(6.4)>E(1.7)
22	B(36.0)>C(26.7)>D(16.3)>E(12.8)>A(8.1)	5	C(44.2)>D(22.7)>B(18.6)>E(8.7)>A(5.8)
2	B(38.4)>C(20.9)>D(18.6)>E(15.7)>A(6.4)	18	B(40.1)>D(27.3)>C(16.3)>E(8.7)>A(7.6)
15	C(35.5)>B(22.1)>A(16.9)>D(14.5)>E(11.0)	20	A(26.7)>B(23.3)>C(20.3)>E(15.1)>D(14.5)
6	D(25.0)>C(24.4)>B(23.8)>A(15.1)>E(11.6)	3	C(39.0)>A(23.8)>E(18.0)>D(13.4)>B(5.8)
9	C(37.2)>D(23.3)>E(16.3)>A(13.4)>B(9.9)	12	B(36.0)>C(29.1)>A(15.7)>D(12.2)>E(7.0)
23	B(37.2)>E(22.7)>A=D(19.2)>C(1.7)	4	D(36.0)>B(22.1)>A(21.5)>E(19.2)>C(1.2)
8	D(43.0)>E(27.3)>A(21.5)>B(6.4)>C(1.7)	13	D(39.0)>E(19.8)>B(16.3)>A(13.4)>C(11.6)
16	E(45.9)>D(20.3)>A(18.6)>B(13.4)>C(1.7)	19	D(33.1)>B(23.3)>E(20.3)>A(18.6)>C(4.7)

不愉快度が高くなるにつれ（「所属」＞「外見」＞「能力」＞「性格」）、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れている。Tannen（1985：98）は、異文化間コミュニケーションだけでなく、同文化内コミュニケーションにおいても沈黙の解釈に相違が生じるという。沈黙という行為は、相手の攻撃的発話に対する衝突を避けるためのストラテジーとしても、または相手の攻撃的発話に対する不満や無視するためのストラテジーとしても用いられる。ゆえに、性格に対する聴者の責任のない場合の攻撃的発話の反応として、沈黙が多用された結果や不愉快度が高くなるにつれて沈黙というストラテジーが多用される関連性を踏まえ、今後、不愉快度と沈黙との相関関係、すなわちフェイスの防御としての沈黙か、フェイスの攻撃としての沈黙かについて、調査・分析が必要であろう。

また、不愉快度が高くなるにつれて、その反応の多様化が見られる。「性格」

と「能力」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定した「B（謝罪）＞C（解明・言い訳）＞…」もしくは「C＞B＞…」のパターンが見られた。しかし、「外見」に対する聴者の責任のある場合の攻撃的発話に対する反応では、男女の反応の違いが明らかであり（表9）、女性のほうがより不愉快度が高かったことが重い反応（C 解明・言い訳、D 反駁）を導いたと考えられる。そして、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。なお、聴者の責任のない場合では、D（反駁）の反応を示す傾向が見られた。

5. 終わりに

本稿は、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と反応を調査し分析した。

分析結果、攻撃的発話に対する不愉快度と反応には、社会的力関係より聴者の責任の有無という要因が大きく作用され、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高い傾向が見られた。対象別による不愉快度は、「所属」＞「外見」＞「能力」＞「性格」であり、すべての項目において女性の不愉快度が高く現れた。不愉快度が高くなるにつれ、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れると共に、その反応が多様化された。また、「性格」「能力」「所属」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定の反応のパターンが見られた。しかし、「外見」では、聴者の責任の有無に関わらず、多様な反応が見られ、とりわけ、男性より女性のほうで重い反応（C 解明・言い訳、D 反駁）が示された。また、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。

以上、攻撃的発話に対する不愉快度とその反応を分析したが、調査結果では、攻撃的発話に対する不愉快度が高くなるにつれて沈黙というストラテジーが多用された。今後、不愉快度と沈黙との相関関係、すなわちフェイスの防御としての沈黙か、フェイスの攻撃としての沈黙かについて、さらに調査・分析が必要であろう。また、調査対象を日本の中学・大学に広げ、さらに韓国の中学・高校・大学を調査し、日本と韓国を比較したい。異文化理解では、言語や文化の多様性と相対性を認識し、多元的かつ相対的な物の見方が求められる。多角的視点から日韓における言語文化の類似点や相違点を明らかにするだけでなく、研究成果を授業へ反映していきたい。

＜参考文献＞

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店

友定啓子・丸田愛子・高木勲・武宮道子（2002）「幼児期における集団活動の成立―個の充実から集団意識へ―」『研究論叢第 3 部芸術・体育・教育・心理』52，山口大学教育学部研究論叢，pp.85-100.

河正一（2014）「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」『地域政策研究』17-1，高崎経済大学地域政策学会，pp.93-116.

―――（2017）「韓国語教育におけるインポライトネスの教授法―社会的・文化的価値体系及び言語的側面からの提案―」『韓国語教育研究』7，日本韓国語教育学会，pp.139-157.

―――（2019）「社会言語学的調査の状況―言語行動に関する日韓対照研究を中心に―」『計量国語学』31-8，計量国語学会，pp.572-588.

薮内昭男（2015）『ポライトネスとフェイス研究の諸相―大きな物語を求めて―』リーベル出版

이성범（2015）『언어적 무례함에 대한 실험화용적 연구 - 공격성 발화를 중심으로 -』서강대학교출판부

Bousfield, D. (2008). Impoliteness in Interaction, Amsterdam, John Benjamins.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Culpeper, J. (1996). Towards an anatomy of impoliteness. Journal of Pragmatics 25: 349-367.

Culpeper J. (2008). Reflections on impoliteness, relational work and power, Bousfield, Derek & Locher, Miriam. A (Eds.), Impoliteness in Language: Studies on its Interplay with Power in Theory and Practice. 17-44. Berlin and New York: Mouton de Gruyte.

Culpeper, J., Bousfield, D., and Wichmann, A. (2003). Impoliteness revisited: with special reference to dynamic and prosodic aspects. Journal of Pragmatics 35:1545-1579.

Tannen, D. (1985). Silence: Anything but. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), Perspectives on silence, 93-111.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20K13138 の助成を受けたものです。

・受付：2021 年 9 月 10 日
・修正：2021 年 9 月 25 日
・掲載：2021 年 9 月 30 日

日本韓国研究 第 1 号

発行日　2021 年 9 月 30 日

発　行　日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町 1 番 1 号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話　072-254-9655

メール（事務局）jak.jimu(at)gmail.com *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ　http://jak.main.jp/（入会手続きはこちら）

編　集　崔 銀景　趙 智英

日本韓国研究会
Japan Association of Koreanology